

2020/1/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報一月号 死と生

新年、あけましておめでとうございます。

今年は、過去との連続を断ち切らぬよう、改めるべきところは改め、「日々新たなり」と自らを更新していく一年です(二〇一九年度 会報十二月号参照)。自らの心を定め(義)、目標を掲げ(志)、自己の拡張(実現)と自他の共栄へと道を伸ばしていきたいものです。

新年を迎えるにあたり、一つの終わりと始まりについて…、「死と生」について考えてみたいと思います。

目次

- ・ 命の循環(生死の繋がり)
- ・ 自分の命を生きる
- ・ 始まりを持つ
- ・ リズムに乗る

● 命の循環(生死の繋がり)

死を身近に感じると時間の密度は上がる。もしも「余命一週間」と宣告されたら、今までと同じ心で生きるだろうか。「違う」と答える人も少なくないと思う。それは、自分を「生きる」ことに、より誠実になるということである。

この時期、木々は葉を落としていて、どこか寂しい姿をしている。しかし、葉が落ちるおかげで、草木は自らの内にエネルギーを蓄え、来るべき春からまた葉を茂らせて花を咲かせ、そして実を結んでいくという命の循環という道を辿る。生の中に死があり、その死が生を支えている。

命の循環という自然の流れの中では、死は無ではない。人の死も然り。その人の高い志や想いの欠片等は、その人が死ぬことで次世代の誰かに受け継がれていく。

自然の流れ(造化のはたらき)とは、生成化育の変化であり、次世代への繋がりであり、生と死の循環である。この自然の流れの前では、ひとりの人間の存在は本当にちっぽけなものだと気付かされる。二〇一九年の自分が死ぬことで、二〇二〇年の新しい自分が生まれる。死んだ自分が抱いていたあの時の想いを受け継ぎ、新たな自分を化育させていく。「日々新たなり」。明日の新たな自分に今日の想いを引き渡す。

生死は繋がっていて、決してどちらか片方だけで成り立つものではない。命とは生

の側面と死の側面の両方を持っている。だから、死を忌み嫌っている生を語る事ができない。前述した木々の命の循環を思い出してもらいたい。生の中に死があり、死が生を支えているのだから。

●自分の命を生きる

去年一年を静かに振り返ってみる。

「全力で生きてきたか？」

「もう一ミリも動けないというところまで自分で自分を運んできたか？」

「恐怖を言い訳にしてこなかったか？」

「何かのせい、誰かのせいにしていじけたりしなかったか？」

そういう弱い態度をとってしまうのも人間だが、その態度は自分を知ってくれている人たちをどれだけがっかりさせてきたことか：。

目指している場所は、不撓不屈の心がなければ辿り着けない所ではなかったのか。全身全霊、己の持っている能力を全て発揮していかなければ成しえないものではなかったか。世間体や肩書や職歴などに固執していくのも一つの生き方だ。だがそれで、己の孝、己の志、己の仁義礼智は果たせていただろうか。

生の最後に見せる死に様。何も思い残すことなく納得して静かに笑って死ぬというのは、全力で生きた人間の証かもしれない。もちろん、大切な人たちのことが心配だと思う気持ちは消えないし、そんなことを考える間もなく死ぬこともあるだろう。しかし、死を深く問うことで、生きる意義を見出そうとする試みは無駄ではないはずだ。

生きていく上で、「他人に迷惑をかけるな」と言われることもある。己の仁義でしっかりと立ち、つまらない誘惑に心が動かなくなるまでは、指針となる大切な言葉だ。しかし、自ら立つてからは、多様な社会で全く人に迷惑をかけずに生きていける人など誰もいない。生きていけば、何かを成そうとすれば、周囲に迷惑をかけてしまうのは必然でありお互い様である。「他人に迷惑をかけてしまうのだから、周囲から迷惑をかけられても、それを許せる器量を養い、皆と共に生きる」と考え、器量（包容力）と機鋒（展開力）を養う。その方が、善いことも悪いことも目一杯やって、最後は縁のあったもの全てに「ありがとう」と感謝して、「楽しかった」と気持ちよく死ぬのではないか、と思うが如何だろうか？

悪いことはしなくてもいいって？でも、人の条件は公平ではないから、立場によって善悪の評価は変わる。恵まれているというただそれだけで、誰かを傷つけてしまっていることさえあるし、善意でやったことが、大迷惑だったということもありうるのが社会というもの。

だからと言って、委縮してばかりもいられない：。そこで、

● 始まりを持つ

論語にあるように、「本立ちて道生ず」である。本とは孝行である。孝を尽くし、己の仁義を尽くしていくことが根本を立てることである。その中で自らの心を定めるものが出てくる。それが志である。志とは、「士」の心。士とは「十(たくさん)」「の欲や誘惑に節度(ケジメ)をつけて、「一」つに心を束ねること。つまり、己の心が定まるところのものが志である。その一つに覚悟を決めれば、気力も勇気も湧いてくる。それが主体性・創造性の始まりである。

主体性・創造性と言えば、ニューマン枢機卿が遺した「人、その生の終わりに至らんことを畏れるなかれ。むしろ、未だかつて「始まり」を持たずして終わらんことを畏れよ」という大好きな言葉がある。俺は何をやってきたかと考えてみると、自分の良心が頷くようなこと、満足するようなことは、悔しいけれどまだ何も成し遂げていない。仕事が、理想を具現化するために与えられた機会だとすれば、折に触れて初心を尋ね、掲げた志を失わないようにして、良心が頷くような「始まり」を持ち、それを己のリズムで邁進し、全うさせたい。

● リズムに乗る

森羅万象は、それぞれが独自の陰陽のリズムを持ち、そのリズムが共鳴し合って新たなリズムを生み、それがエネルギーとなって物事を新たな展開へと変化させていく造化のリズムが生まれる。

個々の持つリズムは他者と共鳴してこそ、新たな造化へと展開していく。だから、自分を新しくしていくには、心を開いて他者との繋がりを持つことが、その近道となる。自分のリズムが変われば、そのリズムに共鳴した周囲は必然的に変わっていく。新たなリズム、そして新たな造化の始まりだ。

この原稿を書いている時はまだ二〇一九年なので、元旦の天気はわからない。

初日の出、見られるといいね。冬の太陽と夜の月、どちらも好きだ。

太陽は、夜の静寂(しじま)を打ち破って、皆を明るく暖かく照らしてくれる。

月は、真っ暗闇の中で、皆が迷って立ち尽くさないように静かに照らしてくれている。

二〇二〇年、太陽の強さと月の優しさを携えて、本を立てて志に邁進したい。

本年もよろしく願い申し上げます。